

藤高和輝著（青土社 2022年）
『〈トラブル〉としてのフェミニズム
「とり乱させない抑圧」に抗して』

山田秀頌*

本書は、ジュディス・バトラーの研究者として出発した著者の二本目の単著であり、バトラーのキー・タームである「トラブル」の概念——言うまでもなく『ジェンダー・トラブル』に由来する——を、発展的に継承した著作である。この概念を田中美津の「とり乱し」に接続しつつ、狭義の「バトラー研究」にとどまらない著者の近年の仕事とも関連付けることで、本書は著者のいう〈トラブル〉に新たな活気を吹き込んでいる。

本書は二部構成であり、第一部はより理論的な文章を、第二部はより実践的な文章を収録したと説明されている（序章）。だが本書を読む読者は、この理論的／実践的という区別は便宜上のものであり、実際には本書の全体が理論的かつ実践的な関心によって貫かれているということに気づくだろう。

第一部第一章では、反社会的クィア理論家の代表であるリー・エーデルマンの議論を通じて、〈トラブル〉の批判的可能性が再検討される。ホセ・エステバン・ムニョスの「非同一化」（48頁）の概念を、フラワーデモにおける伊藤詩織のパフォーマンスとも接続しながら著者が述べるのは、クィアを未来の否定として形象化するエーデルマンとは反対に、〈トラブル〉とはいまだ実現されていない「どこか他の場所」の身体化だということである。

第二章では、ヘーゲルを読むバトラーの「普遍」をめぐる議論が吟味される。著者は、普遍という用語に対する竹村和子の異議に同意しつつも、「普遍」そのものが他者の排除によって成立していることを示すというバトラーの戦略の中に〈トラブル〉を位置づけなおす。〈トラブル〉は、そのような排除の存在を指摘して「オルタナティブな普遍」（75頁）を手

繰り寄せようとするときに取られるある種の身体的行為である。

第三章では、サルトルを読むバトラーとボーヴォワールを通じて、〈トラブル〉の実存的側面が強調される。著者はとりわけボーヴォワールの実存主義とバトラーの普遍概念の共振に着目し、身体的な存在としての人間の、根本的に両義的な位置におけるエイジェンシーとして、〈トラブル〉を位置づける。それはすなわち、身体的存在として私たちが様々な状況に拘束されているということが、同時にそうした状況と闘うことを可能にするような両義性である。

第二部第一章では、バトラーと田中美津の共振関係から〈トラブル〉が「とり乱し」としても位置付けられる。〈トラブル〉と同様、「とり乱し」も「身体的様態」である（109頁）。著者はこうした身体的なエイジェンシーとしての〈トラブル〉＝取り乱しの可能性を封殺する、「とり乱させない抑圧」があると述べ、日本の#MeTooの事例とも関連付けながら、この抑圧の形態はまさに性暴力サバイバーを沈黙させ、サバイバーの連帯を不可能にさせる力学であるとする。

第二部第二章では、英語圏におけるインターセクショナリティの理論的系譜が描かれる。もとより単一の系譜に還元することのできないインターセクショナリティの概念を通じて、本書で著者が特に示そうとするのは、時に不十分であれ他者と向き合おうとしてきたフェミニズムの努力の歴史の中に、トランスジェンダーに肯定的なフェミニズムの実践が確かに存在してきたということである。

第二部第三章では〈トラブル〉の実存的側面がさらに展開される。「男性アイデンティ

*東京大学大学院

ティとトランスジェンダー・アイデンティティのあいだで揺れ動いている」(159-160頁)と述べる著者は、シス／トランスの二元論からは零れ落ちてしまうような違和の経験を「とり乱し」の経験として記述する。ゲイル・ルービン／ゲイル・サラモンの「違和連続体」(168頁)の概念も参照しながら、著者は単純なカテゴリー化に抵抗する「とり乱し」としての違和の経験が、他者との出会いを開くものであるとする。

第二部第四章では、著者は第一波／第二波／第三波と言うときに想定されがちな単線的なフェミニズム史観を退け、むしろ「[現在]に収束されない残余として」の過去、すなわち竹村のいう「[共通性]と[差異]の[……]往還」における不可能な位置への訴えかけこそが、「[フェミニズム]に賭けられているもの」であると述べて、本書の理論的立場を再記述する(195-196頁)。

本書は、バトラーを最大の導き手としつつも、英語圏の理論の「解説」や「適用」にとどまることなく、〈トラブル〉という概念を通じて見えてくる共振関係を積極的に展開することで、時間と空間を超えた政治的な触発を促している。本書がバトラーと田中を接続し、〈トラブル〉＝「とり乱し」と現代日本の #MeToo を接続するとき、そこでは英語圏と日本、理論と実践、過去と現在が複雑に折り重なって提示されている。のみならず、第二部第二章・第三章では、時にばらばらのものとして思考されがちなフェミニズム／クィア／トランスが互いに切り離し得ないものであるということ、これらを運動や理論の単線的発展として捉えることは誤りであることが示されている。本書に従えば、こうした運動や理論の複数の軌跡は、様々な差異をもつ私たちが、身体的存在として、世界に内在しながら世界を変革しようと試み、異なった未来を切り開こうと

格闘してきた努力の軌跡である。私たちはいかに〈トラブル〉を生き、また〈トラブル〉に応答するののかという視座から、より幅広い身体的な交渉や苦闘を包摂しようようなフェミニズムの可能性を示したという点に、本書の最大の意義がある。加えて、単線的な発展モデルの拒絶は哲学史にも向けられているが、このことは本書における著者の誠実さを特にあらわすものであろう。なぜなら、「私はなぜか「実存」という言葉に惹かれるし、なにか思考しなければいけないという切迫した要請から離れることができない」(81頁)と率直に書く著者が、時代錯誤とみなされることを承知で実存主義を取り上げると述べる時、それは著者が自分自身の問いにあくまで忠実であることを示しているからである。実際、著者と同じように〈トラブル〉の感覚とともに生きている読者は、本書の筆致に流れている著者の誠実な思考を好ましく思うだろう。

著者は、トランスフェミニズムが「新しい」運動であるという想定を批判し、むしろ「フェミニズム内部の「トランスーポジティブな言説」を過去の蓄積から「発掘し、引き継ぎ、紡ぎだす」ことが重要であるとする(147頁)。この視点はまったくもって適切なものである。だが、そのプロジェクトを「いまーここ」において探求するという試みは、本書が触発する潜在的な可能性のうちの一つにとどまっている。本書が英語圏の文脈において描き出した「インターセクショナル・フェミニズム」の系譜が日本の文脈において書かれるとすれば、それはいかなるものになるのか。田中美津と #MeToo のあいだはどのように語られるべきなのか。本書が空白によって暗に指し示しているその問いは、今日、日本のフェミニズムを考えるうえでの切迫性を帯びているように思われる。